

この声

登場人物 男1

女1

女2

女3

とある高校、美術準備室。

教師である男1は絵を描いている。

生徒である女1は、辺りを見回し部屋に入る。

女1 先生…。

男1 …はい？

女1 …。

男1 どうしました？

女1 あのお、先生。

男1 はい。

女1 もしもですね、もしも仲の良い友達が、ゾンビになりそうだったらどうしますか？

男1 …え？

女1 もし、仲の良い友達が、ゾンビになりそうだったら。

男1 …ゾンビ？

女1 はい。

男1 …ゾンビってなんですか？

女1 …え、そこから？

男1 …いや、そこからでもないんですけど、

女1 え？

男1 君は、誰？

女1 申し遅れました、野村です。

男1 野村さん…。

女1 …え？

男1 …え？

女1 私は音楽を選択しているので先生の授業は受けてないですよ？

男1 …ええ、だから、存じ上げなかったので、すみません。

女1 私、学級委員やってるんです。

男1 はい…。

女1 だから放っておける訳ないじゃないですか、もし仲の良い友達がゾンビになりそうだったら。

男1 …そう、なんですか。

女1 …。

男1 …それで？

女1 ゾンビって言うのは、動く死体の事を言うんですけど、

男1 動く死体？

女1 死んだ人が、死んだまま生き返るんです。

男1 …ああ。

女1 元は、どこの国だったか忘れちゃったんですけど、なんか、そう、イタコのような？そういう人達の、魔術みたいな力で、死体を意のままに動かして労働力として使ってたみたいなんですけど、最近は何んか、ウイルス？的な事で、人がゾンビになっちゃうケースもあるみたいなんです。

男1 ウィルス…？

女1 はい。

男1 …で、お友達が、その、ゾンビに、なりそうなんですか？

女1 はい。

男1 ああ、そう。

女1 遅かれ早かれなっちゃうと思うんです。

男1 …そうですか。

女1 …。

男1 それは、あれですね、可愛いそうですね。

女1 可愛いそうと言うか、周りに迷惑掛かりますから、ちよつとどうしようかって話になって、

男1 …はあ。

女1 だってほら、ゾンビになったら人に感染するじゃないですか。

男1 ……感染？
女1 その、ウイルス？的な事。
男1 うつるんですか？
女1 そりゃあうつりますよ、増えたらもうあつと言っ間ですよ？この学校なんてすぐにゾンビの人たちで埋め尽くされて、それはもう絶望的に増えていきますよ。
男1 ……それは、大変ですね。
女1 先生のところにもやってきますよ、だって人の臭いを嗅ぎ分けて集まってくるから。
男1 ……ゾンビが？
女1 はい。
男1 ……どうして？
女1 どうしてって、人を食べるからに決まってるじゃないですか。
男1 ……人を、食べる？
女1 はい。
男1 ……どうして？
女1 どうしてって、食べたいからに決まってるじゃないですか。
男1 ……食糧として？
女1 先生は、どうしてご飯食べるんですかって聞かれたらどう答えますか？
男1 ……それは、生きる為。
女1 ……そうですよね。
男1 ……え、でも、そのゾンビ？は、死んでるんですよね？
女1 はい。
男1 ……死んでるのに、生きる為に人を食べるんですか？
女1 そうなんですよ。
男1 ……ん？
女1 それはもう本能ですね。
男1 ……本能？
女1 人を食べたいって言う…、というかその辺りの事はゾンビに聞いてみないと分からないですよ
私に聞かれても。
男1 ……すいません。

女1 まあ、聞けないんですけど、「うー」とか「あー」とかしか言わなくなりますから。
男1 ああ…。
女1 ……(じつと見ている)。
男1 ……はい？
女1 視力は、弱いみたいなんです、だから鼻と耳？で獲物を探してるみたいなんですけど、
男1 ……それは、人間しか食べないんですか？
女1 いや、そんなことなかったと思いますよ、犬とかもゾンビになっちゃいますから。
男1 ……ん、どういう風に感染するんですか？
女1 噛まれると。あと、引つかかれたりしてもなるんじゃないかな。だから体液が口とか傷口とかに入ると、たとえばほら、ゾンビと同じ鍋をついたりすると、そのメンバーみんなゾンビになっちゃいます。(笑) まあゾンビと鍋をつくなんでありえないですけどね、だってゾンビは鍋食べないし。
男1 ……空気感染はしないんですね。
女1 あ、はい。空気感染はしないから安心してください。
男1 ……よかった。
女1 あと何か聞きたいことはありますか？
男1 ……えっと、…特にないですね。
女1 ……そうですか。
男1 ……じゃあちょっと、作業に戻っていいですか？
女1 先生は、絵を描いてるんですね。
男1 今度コンクールがあつて、そこに出す為の絵をね、描いてるんです。
女1 先生は偉いですね、授業の合間にも絵を描いてらっしゃる。
男1 元々好きでやってた事ですから、教師になったのは偶然です。
女1 ……どんな絵を描いてるんですか？
男1 人物画です。
女1 見ていいですか？
男1 どうぞ。
女1 ……！！！！！！
男1 妻と息子です。

女1 そうですか…。
男1 まあ、今は一緒に暮らしてはいないんですけどね、
女1 でしょうね…、
男1 じゃあ、そろそろ、
女1 そうだ、大事なことを忘れてました。
男1 …はい？
女1 ゾンビは、頭が弱点なんです。
男1 …頭が？
女1 もともと死んでるゾンビですから、何をしても死なないんですけど、唯一頭を潰すと、死ぬんです。
男1 …そうだったんですか、それは、聞いておいて良かったです。
女1 友達が言うには、ゾンビになる前に頭を潰して欲しいと、そうしたら私達に危害を加えなくていいからと、
男1 …友達か？
女1 …なんて友達想いの子なんだろうと、私達泣いたんですね。どうしてこんな子がゾンビにならな
いといけないんでしょう。教えてください先生。
男1 …うーん、そうですね、
女1 そんな友達想いの子の頭を、またゾンビになってもいないうちに潰すなんて、私にはできない。
男1 まあそうでしょうね、
女1 だからどうしたらいいかわからなくなつて、ちょっと考える時間が欲しいという事になって、
それで先生に相談してるんです。
男1 …私に聞かれても、
女1 たまたま先生、暇そうにしてらっしゃったから。
男1 暇じゃないですよ、絵をね、描いてましたから。
女1 先生なら、どうしますか？
男1 そうですねえ、まあ、どっちでもいいですけどね、
女1 え？
男1 あ、いや…、そうですねえ…、そうだ、なかなか、人間の頭を潰すって、難しそうですね、
女1 そうなんです、そんなこと私やった事ないし、

男1 まあ、ほとんどの人はやった事ないと思いますけど、
女1 そうですか。
男1 …なんか、鉄パイプとか金属バットとか使つて、
女1 なるほど！
男1 それがいいんじゃないですか？
女1 あ、の、ゾンビになると、人間よりも身体能力が高くなるんですね、
男1 ああ、そう。
女1 痛みを感じないから、肉体の限界まで力が出ちやうみたいですよ。
男1 …なるほどね。
女1 だから、なかなかゾンビになった友達の頭を、ついても難しいと思っんですよ。
男1 そうですね。
女1 ええ。
男1 …じゃやっぱりゾンビになる前に、まあじつとしてもらつて、
女1 やっぱりそれしかないんですね？
男1 それかまあ…、ゾンビになつても動けないように、生きているうちに縛り付けておくか、
女1 ああ！
男1 ねえ、そしたらゾンビになつても動けない訳ですし、まあ、そのまま頭を潰せばいいですからね、
女1 さすが先生、その発想はなかったです。
男1 でしょお。
女1 どこかにロープみたいなもの、無いですかねえ？
男1 体育準備室に行くといい。
女1 そうか！
男1 ほら、こうしている間にも、友達がゾンビになるかもしれないですよ？
女1 そうなんですよ。
男1 だったら早く戻った方が、
女1 ちなみに、噛まれて、ゾンビになるまでには、個人差があるんですけど、すぐなる人もいれば、
まあ、なるまでに結構かかる人もいます、
男1 あ、そう…。

女1 だからまあ、私の友達も、そういう、なるまでにちよつと余裕がある事にしてるんですけどね、

男1 …… 幾ら君たちがそういう事にしていても、相手はゾンビですからね、

女1 ああ…、

男1 ほら、最後に何か、声でもかけてあげた方が、

女1 そうですね、

男1 ええ、

女1 じゃあ先生のそのアイデア、頂こうかしら、

男1 うん、それがいいと思いますよ、

女1 じゃあそうやって皆に言ってみます、

男1 はい、

女1 本当に先生に相談して良かったです。ありがとうございました、

男1 うん、また何かあったらいつでも来て下さい、

女1 はい！

女1、去る。

男1、満足気な笑みを浮かべ、絵に向かう。

しばしの間。

女2がやってくる。

女2 あの、先生、

男1 …… あ、はい？

女2 もしもですね、もしも、友達が、いじめを受けているとしたら、私はまずどうしたらいいですか？

男1 え、いじめですか？

女2 教室で、なんかそういう展開になっちゃったんですけど、その場で声を掛けることがどうして

も出来なくて私…、

男1 …… わかりました、どこですか？

女2 待って下さい。いじめてる子もいじめられてる子も、どちらも私の友達なんです。できれば大

ごとにはしたくないんです…、

男1 しかし、

女2 もしかしたら私の勘違いかもしれないんで、

男1 いじめを放っておく訳には…

女2 まず、私にできる事はなんなのか、それを教えて欲しいんです、

男1 …… どういう状況なんですか？

女2 授業も終わって、皆が帰りの支度をしてた時の事です。突然私の友達が、私の友達の事を、

鎖で縛って身動きとれないようにしたらいいんじゃないかって言い出したんです、

男1 …… え？

女2 それっていじめですよ？

男1 鎖で、縛っている…？

女2 正確には縛ろうとしているんですけど、

男1 ……

女2 私ちよつとどうしたらいいかわからなくなって、下手な事言うと、今度私がターゲットにされるじゃないですか、

男1 いや…、えつとですね、その…、さっきアドバイスはね、させてもらったんですけどね、

女2 あれ先生の差し金だったんですか？！

男1 いや、

女2 え、じゃあいじめグループとグルだったんですか？！

男1 あのですね、

女2 ああー！え、グルってグループの略語だったんですね！今知りました私！

男1 さっきね、その、えつと、誰さんだったかな…、その、友達が？来てね、その…、友達が、ソ

ンビになりそうだから、どうしたらいいかって言う相談をね、されたんですよ、

女2 …… は？

男1 だからそれは、その、ゾンビになる前に縛っておいたらという話はね、させてもらったんです

けど、…だつてほら、ゾンビになると人を襲うって言うから、

女2 ゾンビってなんですか？

男1 …… だからゾンビって言うのは、生きた死体の事で、

女2 生きた死体？！

男1 …… 死んでるのに動いちゃうんですけど、

女2 え、え?!
男1 …え、ゾンビ知らないんですか?
女2 初めて聞きました。
男1 あ、そうなの?
女2 それで?
男1 いや…、あのね、ゾンビっていうのは、元々はあれ、確か、イタコの人が作ったんだと思いま
すよ。
女2 え、イタコって青森の?
男1 そうそう。イタコが、死んだ人にも労働して欲しくて、そういう魔法をかけて、働かせたって
言うのが始まりみたいなんですけど、
女2 え、イタコの人が、死んだ人を働かせる為に作ったんですか?
男1 うんそう。
女2 ひどいですね、死んだあとも働かされるなんて。
男1 …ひどいですね。
女2 え、友達はゾンビになっちゃったって事ですか?
男1 うん、まあ、そういう話なんでしょうね。
女2 どうして? だって友達はまだピンピンしてるのに、あれで死んでるんですか?!
男1 うんとね、昔は死んだ人をそうやって働かせてたんですけど、今はその、ウイルスで? そうい
う風になることが出来るそうなんです。
女2 ウイルス? 風邪みたいな?
男1 そう。
女2 うつるんですか?
男1 うつるんですよ。
女2 ええ?!
男1 もうね、あつという間にうつりますよ。
女2 どうして?
男1 なんかね、鍋を食べたりするようになるんですよ。
女2 鍋?
男1 そうそう。

女2 鍋を食べるとなるんですか?! じゃあもう鍋食べられないじゃないですか!
男1 …そうなんですよ。
女2 冬になったら皆ゾンビになっちゃう!
男1 これからの季節、危険ですね。
女2 鍋焼きうどんはどうなんですか?
男1 鍋焼きうどんは…、まず大丈夫です。
女2 すき焼きは?
男1 セーフにしましょう!
女2 一体どういう事なのかわかりませんが、とにかく友達は、何かの鍋を食べたんですね、
男1 何鍋なんでしょうね。
女2 でも鍋さえ食べなければ大丈夫なんですわ。
男1 その通りです。
女2 早く皆に報せないと。
男1 そうしてください。人類の危機が今すぐそこまで来ています。
女2 そうですよ、最近は一入暮らしの人も多いから、一人鍋をして、一人で死んで、一人でゾン
ビになるなんてそんな虚しい事はありませんわ。
男1 そうですね、ワンルームの部屋で人知れずゾンビになってる訳ですからね。
女2 友達は、いつゾンビになってしまうのでしょうか?
男1 いつでもでしょうね、なんか人によってタイムラグがあるらしいですから、でもまあ、時間の問題
だとは思ってますけど。
女2 友達が、ゾンビになってしまう…。あの美しいお友達が、ゾンビになってただの労働力になっ
てしまう。
男1 ゾンビウイルスが発症すると、一旦死んで、そのあと動き出すと、人を食べます。
女2 …先生ごめんなさい。なんだか私もう、処理しきれなくなってきましたよ。
男1 そうでしょうね。
女2 え、なんで人を食べるんですか? 働くんじやないんですか?
男1 最新のゾンビは、ただ、人を食べる為だけに動くんです。
女2 は?
男1 そういう、もはや人類にとつての敵になるんですよ。

女2 どういう事ですかそれ！

男1 生きる為ですよ。

女2 生きる？

男1 そう！

女2 でもゾンビはもう死んでるんですよ？

男1 だからそれは、そういう本能なんですよ。

女2 本能…？

男1 おそらくですね、人を食う、殺人ウイルスが、そのまま具体化しちゃったものだと思いますね。

女2 殺人ウイルスが具体化？

男1 そうですな。

女2 確かにがん細胞とか、人を殺すまで増殖をやめませんもんね。

男1 そう、そういう事です！

女2 先生はどうしてそんなにゾンビに詳しいのですか？

男1 まあ、常識ですな。

女2 友達が、人を食べる…、あの美しいお友達が…。

男1 いくら美しくても、食べる時は食べますよ。

女2 治す事は出来ないんでしょうか？

男1 残念ながら。

女2 …。

男1 それが、ゾンビです。

女2 じゃあ友達はどうして友達を縛ろうとしてるんですか？

男1 ゾンビになつたら人を襲いますからね、人を襲う前に頭を潰すつもりです。

女2 頭を？

男1 ゾンビは頭が弱点ですから、頭を潰すと動かなくなるのです。

女2 じゃあ、あれははじめではなくて、友達が友達の為に…！

男1 そうなんです、あの子はその子の為に、一番辛い役目を買って出ているのです。

女2 そうだったんですか…。

男1 心中お察しします。

女2 先生…、

男1 はい。

女2 そんな話を、私が信じてお思いですか？

男1 …え？

女2 子供じゃないんですから、バカにしないでと言いたい。

男1 いや本当なんです、本当に、そう言ったんですよ、その友達は、

女2 鍋食ってゾンビになるとかバカとしか言いようがない。

男1 だって、

女2 こうしちゃいられないわ、みんなを放っておくのはとても危険。先生、やっぱり私、しばらく様子を見えます。しばらく見て、何かあったらすぐ来てもいいですか？

男1 …いや、もう私に何が出来るかわかりませんが…。

女2 ありがとうございます！

男1 まあ私でよければ、まあ…。

女2 失礼します！

男1 あ、ねえ。

女2 はい。

男1 君、名前は？

女2 赤池です。赤池裕子。

男1 赤池さん。

女2、去る。

男1 赤池裕子…(カンバスにメモする)。

男1、絵に向かう。

しばしの間。

女3、やってくる。

女3 先生？

男1 …はい？

女3 先生？

男1 …はい？

女3 先生？

男1 …はい？

女3 先生？

女3 人は、死んだらどうなるのでしょうか？

男1 …は？

女3 私、小さい頃からずっと、死ぬのが恐くて、恐くて、毎日死ぬ時のことばかり考えて生きて来たんです。

男1 …はい。

女3 人と居る時はいいんです、でも一人になると必ず、私は死んだらどうなるのだろうかと考えてしまうのです。

男1 …そう、ですか。

女3 それはやっぱり「孤独」になると、自分を意識するからだと思えます。自分を意識した途端、自分がなくなる時の事を考えるんです。

男1 …なるほど。

女3 先生教えてください。人は、死んだらどうなるのですか？

男1 …うーん、それは、難しい話ですね。

女3 先生はいつも暇だから私達生徒の話聞いてくれると聞いたんでやってきたんですけど。

男1 …まあ、暇ではないんですけどね、

女3 そうですか。

男1 どうしてそういう評判になってるのやら…。

女3 先生は、死んだらどうなると思いますか？

男1 …そうですね、…まず、天国に行って、

女3 はい。

男1 同じ、天国に行った人たちと、会って、仲良く、暮らす…、

女3 どんな風に？

男1 …光に包まれた、雲の上のような場所で、なんか、白い、絹の、肩からこう、すらーっとなってる、ほぼ、裸のような

女3 …は？

男1 そういう、人達が、おもにハープのような、弦楽器を弾いて、

女3 人の形してるんですか？

男1 そうそう。

女3 女の人も？

男1 そう。

女3 ほぼ裸で？

男1 まあ、ほぼ。

女3 …。

男1 …私も、死んだことがないので、はっきりした事はわからないのですが、

女3 先生は、天国では誰に会いたいですか？

男1 …そうですね、おじいちゃんとか？

女3 …。

男1 あとはまあ、ゴッホとか、シャガールとか？

女3 ほぼ裸で？

男1 …まあ、はい。

女3 …（ため息）。

男1 …いや、天国ですから、

女3 天国はそういうところなんですか？

男1 そういって言うか、だって、そういうものですよ？

女3 天国があるって事は、地獄もあるんですよね？

男1 …そう、ですね。

女3 地獄はどんなところなんですか？

男1 …鬼が、

女3 …。

男1 金棒を持って、

女3 …。

男1 とげとげのついた、痛い、

女3 …。

男1 それを持って、追いかけてまわしてるんですけど、

女3 …人を？

男1 そうそう。

女3 その人達はどんな格好してるんですか？

男1 …だからまあ、ほぼ、

女3 …(ため息)。

男1 …いや、だって、

女3 天国の人と、どっちが裸ですか？

男1 どっちが？…まあどっちがと言われると、うんと、裸の面積は…、地獄の人の方が、多いですね。

女3 裸の面積？

男1 だから、皮膚の見えている範囲？

女3 …(ため息)。

男1 だってそれは地獄だから、寒いし、そういう、罰だから、

女3 地獄は×で、天国は○ですか？

男1 いや、○×ではなくて、刑罰の罰で、

女3 地獄は罪を犯した人が行くんですか？

男1 まあ、そういう事になるんじゃないですかねえ？

女3 じゃあ天国は…褒美ですか？

男1 …まあそういう事になりますね。

女3 裸で？

男1 まあ、ほぼ。

女3 …(ため息)。

男1 …いや、あなたさつきからやたらと裸にこだわってますけど、あなたの思ってるのは、そういう、なんか、たぶんその、変態とか？そういう、いやらしい事なんでしょうけど、そういう、概念の無い？もう、そもそもそういう、その、全ては、今生きている、俗世間の影響で、もはやそういう…、ええ。

女3 私やっぱ死めのが恐いです。どっちにしろ裸にさせられるなんて。

男1 いや、ですから、ほぼ、ですから、全裸ではないですから、

女3 ほぼ裸というのは、ほぼ全裸なんですよね？

男1 いや、その「ほぼ」の程度でいくと、どちらかと言えば、全裸よりは、服を着ている方に針は振れます。

女3 さつきから先生何を言ってるんですか？

男1 …それはあなたですよ、どうしてそう裸にこだわるのか、

女3 先生なら真剣に話を聞いてくれると聞いたのでここまでやってきたんですけど、

男1 いや、私もね、安心させてあげたかったんですけどね…、

女3 私帰ります。

男1 あ、すみませんでした、お力になれなくて、

女3 いえ、先生が変態だという事がわかりました。

男1 …いやだってそれは話が違っじゃないですか、

女3 どうして死後の世界の話が、全裸の話になるのやら、

男1 いやだからそれはね…、

女3 帰ります。

男1 …わかりました。

女3 ありがとうございます。

男1 いえ。

女3 そうだ、また何か気になる事があつたらすぐ来てもいいですか？

男1 …あのお、私は、皆さんの期待しているような答えは出せないとはいいますから、誰か別の先生のところへ行った方が…、

女3 だって他の先生は皆さん忙しそうだから、

男1 言っておきますが、私だって暇じゃないですからね。皆さんの中でそういう話になってるならとても心外です先生。

女3 じゃあ何をやってるんですか？

男1 絵を描いてるんです、見たら分かるじゃないですか。

女3 見てもいいですか？

男1 …どうぞ。

女3 ………

男1 まだ完成してはいないんですけどね、君たちのせいで遅れてるんで。

女3 …これが、奥さんと息子さんですか。

男1 …あ、ええ。

女3 ありがとうございます。

男1 この絵がどうして妻と息子だと分かったんですか？

女3 友達から聞いたので。

男1 …え？

女3 失礼します。

男1 あ、ねえ、

女3 はい。

男1 君の名前は？

女3 申し遅れました。上田です、上田愛子と言います。

男1 上田さん。

女3、去る。

男1 上田愛子（カンバスにメモする）。

しばしの間。

女1、やってくる。手には鎖。

女1 先生…。

男1 …あ、君は、

女1 野村です。

男1 …君、下の名前は？

女1 栄子です。栄える子と書いて栄子。

男1 野村栄子…（メモをする）。

女1 あのお先生…？

男1 …ああ、はい。

女1 もしもですね、もしも、仲の良い友達が、セクハラに遭っていたらどうしてあげますか？

男1 …え？今度はセクハラですか？

女1 私の仲の良い友達が、セクハラに遭っているようなのです。私はどうしたらいいですか？

男1 …まあ、そうですね、とりあえず話を聞いてあげて、

女1 もう聞いてあげたんですね、だから知ってるんですけど。

男1 ああ、そうか。

女1 友達、泣いてましてね、わんわんと。わんわーんと。

男1 …そうなんですか。

女1 どうしたらいいですか、友達として。

男1 …それはその、どういう、状況なんですか、その…

女1 この学校の先生らしいんです。

男1 …先生？

女1 そうなんです。だから、先生なら何か良い方法を教えてくれるんじゃないかという話になったんですけど。

男1 …誰なんですか、その先生は。

女1 それが教えてくれないんです。セクハラしているなんてバレたらきつとその先生、先生をクビになりますでしょうか？だから友達は、先生の事を庇ってあげてるんだと思います。

男1 …なるほど。

女1 そんな目に遭っても、先生の事を考えてあげられるなんて、なんて心優しい子なんでしょう。

男1 …まあ、そう、ですねえ。

女1 でも私は許せない、私の大切な友達が苦しめるその先生を、私は絶対に許しませんわ。

男1 …ちよつとそれは、本人から事情を聞かないといけませんね。

女1 でも誰にも言うなど言われているんです。

男1 しかし、話を聞かない事には、

女1 じゃあ本人から先生に相談するようにさり気なく促してみますね。

男1 うん、そうして貰えます？

女1 わかりました。

男1 私、しばらくここに居ますから。

女1 はい。

男1 ええ…。

女1 それにしても、血も涙もない男というのは居るんですね。私、男の人嫌いです。

男1 …まあ、いろんな人が居ますからね、

女1 裸になるよう強要されたんですって。

男1 …、

女1 あなたはもうすぐ死ぬんだから、死んだら裸になるんだから、今ここで裸になるのも一緒だと。

男1 …、

女1 天国行っても裸、地獄に行っても裸、どっちみち裸になるんだから、今裸になったっていいじゃないかと。

男1 …、

女1 最低ですよ。

男1 …ん？

女1 友達はどうすぐゾンビになるんですよ？そんな今にもゾンビになろうとしている友達を裸にするなんて許せない。

男1 …え？

女1 ねえ先生、どうして友達ばかりこんな辛い目に遭うのでしょうか？神様はどうして友達を目の敵にするの？私、哀しいです。

男1 …ああ、その、セクハラ？を受けている子と、ゾンビになりそうな子、一緒なの？

女1 あ、はい。

男1 …どういう事なんだろうなあ、…うんと、先ほどですね、その、上田愛子さんが来てね、その、死ぬのが怖いから、何かいいアドバイスはないかと相談されたんですね。

女1 はい…。

男1 それでまあ、私の思う事はね、話させてもらったんですけど、

女1 はあ…。

男1 …まあいいや。あの、上田さん、呼んで来て貰えますか？

女1 ウエダさんをここに…？はい。わかりました。

男1 すいません。

女1 友達はどうすぐゾンビになってしまう。もうすぐゾンビになってしまう女の子がセクハラを受けるなんて、やっぱりこの世界はどうかしているわ。

男1 ゾンビになりそうだったらあんまり出歩いちゃまずいと思うんですけど、

女1 トイレ休憩になったんです。

男1 そんなのあるの？

女1 その話はどうすぐ終わる感じだったんです。それなのにセクハラの話になってしまったので、なるほどね…、

女1 一度ダメになってしまうのもいいかもしれない。ダメになって、初めてこの世界がどうかして

いた事に気づくのよ。

男1 そうですか…、

女1 私、辛いです。

男1 私もです。

女1 本当に辛いのは友達です。

男1 すいません…。

女1 その先生は、そのゲスの極み野郎は友達がゾンビになるのを良いことに、性のおもちゃにしようとしていた。

男1 …まあ、ゾンビになるのを良いことについて、なんか意味がよくわかりませんがね、

女1 はうっ…。

女1、鎖をその場に落として去る。

男1、鎖を拾い、溜息を吐く。

女2、やってきて、

女2 先生ごめんなさい。友達は友達をいじめている訳じゃなかったです。先生の仰る通り、友達はゾンビになるそうです。疑ってごめんなさい。

男1 ああ、ちようどいいところに。あの、そちらではどういう話になってるんですか？

女2 私は本当に、一つの角度からしか物事を見ない人間だったのだなと思えました。先生のゾンビの話聞く前は、ただのいじめにしか思えなかった会話が、これはゾンビになってしまった友達との決別だと思っただけ聞いてるとすべてがもうそうとしか思えない会話に聞こえてくるんです。それには私とても感動しましたね。

男1 …あそう。

女2 思い込みや偏見は真実を曇らせるわ。

男1 …なんかさ、セクハラの話になってるそうじゃないですか。

女2 セクハラ？

男1 ええ…。

女2 誰がですか？

男1 …誰、とかではなくて。

女2 はあ。

男1 ……え、もしかしてそんな話はしてないんですか？

女2 私、セクハラの話なんかで感動しませんわ。

男1 ああ…、いや、その、野村さん？が、その、先ほどこちらに来ましてね…、なんか、まあ、その、そのような？その、

女2 は？

男1 ……ええ？なんだよあの女…、あーもー…、

女2 先生？

男1 いや…、要は、騙されたと言いますか、まあ遊ばれたと言いますか、

女2 弄ばれた…？

男1 ……ちよつと野村さん呼んで来て貰えます？

女2 ……ノムラさん？わかりました。

男1 すいません…。

女2 (小声で) 先生。

男1 ……はい？

女2 (小声で) ノムラさんは好きなんじゃないですか？先生の事。

男1 (小声で) はい？

女2 (小声で) やりましたね、まだまだ人生捨てたもんじゃないですね。

男1 (小声で) ……何を言ってるんだ君は。

女2 頑張ってください、私は先生の味方ですから！

女2、去る。

男1 ……。

女3、やってきて、黙って立っている。

男1 あ、ああ、わざわざ来て頂いてすみません。いや、あなたは悪くなかったんですよ。疑ってしまつて申し訳ない。すべてはあの野村さんが悪いんであつて、なのであの、特に用はなくなつて

しまつたと言いますか…、

女3 特に用は、ない…？

女3、襟元を抑える。

男1 あ、じゃあ、良いことを教えてあげますよ。先ほどの、死んだ後の話なんですけど、

女3 ……はい。

男1 あれ、実はちよつと間違つておりましたね、

女3 ……え？

男1 ちよつとね、あの、靈感の強い人からね、もう一度聞いてみたんですけどね、そうするとどうやら、そういう天国とか地獄とか、無いみたいなんですよ。

女3 (喜んで) そうなんですか？！

男1 そうなんですよ。

女3 じゃあどうなるんですか？！

男1 実はね、

女3 はい！

男1 人は死んだら、「無」になるらしいです。

女3 ……無？

男1 ええ、もう、何もなくなるみたいですよ。

女3 ……じゃあ、死後の世界も、生まれ変わりも、無いって事ですか？

男1 そういうことすな。

女3 ……。

男1 ですから、裸になる事はないですから、安心ください。もうね、恥ずかしいとか怖いとか、そういう気持ちもきれいさっぱり何もなくなりますから、大丈夫ですよ。

女3 ……それが一番嫌だったんです…。

男1 ……え？

女3 それがいっぱい嫌なんです！この私の…、この…、見えている物とか…、感じている事、私というモノが、…何もなくなってしまうのが、一番嫌だったのに…、

男1 ……あ、そうだったんですか？

女3 そんなにだつたら天国でも地獄でも裸で居た方がまだマシだわ。

男1 え？

女3 スーパー銭湯で間違えて男湯に入っちゃったけど私は間違えてる訳じゃなくて性転換をしたんだからこういう姿形をしているけれど男なんだと開き直ってる私だと思えばずつと良い！でも何も無いなんてそんなの悲しすぎる…。先生のバカ！私なんの為に先生に相談してると思ってるの！？

男1 なんの為なんですか…？

女3 あバカー！

男1 え？

女3、去る。

男1 …なんの為なんだ。

女1、やってきて、

女1 先生、

男1 あ、来たな。君にひとつ、聞きたい事があるんだがね、

女1 私もです。私も先生に言いたい事があります。

男1 …ああ、そのことでしたらきちんと断っておきたいんだが、私はね、もうすぐ四十になります。

妻と息子とは別居中ですが、まだ離婚している訳ではない。君の気持ちはうれしいのですが、

女1 セクハラしたの先生らしいですね。

男1 …は？

女1 先生は、私の友達に、絵のモデルにならないかと巧みに嘘をつき、服を脱がせ、わいせつな行為をしようとしていたそうですね。

男1 誰がそんな事を…？

女1 ごまかすのはやめなさい。

男1 上田さんでしょうか？上田さんがそう言ったんですね。

女1 言う事を聞かなければ内申点を全てゼロにすると、きれいさっぱり何もなくなすと聞いたそうじ

やないですか。

男1 いや、それはだからその部分だけを抜き取ればそうなるかもしれないませんが…

女1 どうしましょう、私はセクハラ教師にセクハラの相談をしてしまった！

男1 違いますから！それは上田さんが勝手に誤解しているだけです。

女1 誤解だろうがなんだろうが、セクハラは、受けた側がどう思うかなんです。

男1 それは分かっていますけど…、

女1 (大声で) 先生が、セクハラ…！

男1 ちよつと！

女1 近寄らないで変態！

男1 …君ね、目的はなんなんだ？私知ってますよ、そもそも上田さんはそんな事言っていないでしょうやないですか。私知ってますからね。あなた私が何にも知らないと思ってるかもしれないですけど、私知ってますからね。私には優秀な部下が居るんです！

女1 美術教師はむつつりスケベがなるものだと皆言っておりましたがまさか本当に居たとは。

男1 とぼけるんじゃないよ！だいたい私の事が好きなら、もつと高校生らしく、ノートのきれつばしに書いたラブレターから始めてみるとか、美術を選択してないにも関わらず放課後になるとなぜだかここにやってきて勉強を始めるだとか、その時やたらと思わせぶりな視線を送ってみるとか、したらどうなんだ。こんなスリリングでわかりにくいやり方ではなく、もつと可愛らしくだね、

女1 セクハラだわこれが。私は今、セクハラを受けている真つ最中だわ！

男1 …とにかくだね、私はセクハラしてません。…そんなのひどいですよ、だつて話を聞いてくれと言うから聞いてあげたのに、なんでそんな言われようなんですか。私は、絵を描いてただけなんです。君達と話をしたい訳じゃないし、教師になって十六年、一度も君達に興味を持った事ありませんよ。

女1 ああ、そうか！私、皆に言つてあげます。

男1 何を？

女1 先生は、セクハラをしたつもりはないと。

男1 あ、ああん！そうしてくれる？

女1 先生にそういうイヤらしい気持ちは一切なく、純粹に絵を描こうとしていただけだと。

男1 全然違うけど、まあそれでもいいですよこの際。

女1 これからゾンビになってしまう女性の姿を、絵に描きとめておこうとしたのだと。

男1 …なにそれ？

女1 絵描きには、そういう衝動があると聞いた事があります。ある種の残酷さと言いますが、死を描く事で生を感じるのでしょうか？

男1 全然そういう趣味はないですけど…

女1 だって先生…

女1、また男1の絵を覗き見る。

男1 …なんですか？

女1 ……

男1 …ちよつと、そんなにびつくりする事ないじゃないですか。

女1 ……

男1 何をやってるんだ君は…。いや、わかりますよ。この絵に彩りがないのが気になるんですよ？これは、グリザイユ画法と言って、単色で下絵を描くやり方なんです。モノクロで下絵に陰影を付けていくんです。これから色を載せていくところなんです。まだ未完成なんです。だから早く仕上げてしまいたいですよ、それなのに君たちが邪魔をする。

女1 そろそろ戻ります、皆が心配だわ。

男1 そうしてください。

女1 また来ます。

男1 もういいですよ来なくて…

女1 だって先生、いつでも来ていいと言いませんでしたか？

男1 …もう他の先生に相談した方がいいですよ、私はすぐ誤解される性質なので、

女1 だって他の先生はもう居ませんもの。

男1 じゃあ君たちも帰った方がいいんじゃないですか？暗くなりますよ。

女1 まだ帰れませんよ、ゾンビになってしまう友達をこのまま置いては行けませんもの。

男1 …遊びもほどほどにしないと、君は何年生？

女1 三年です。

男1 もう三年だったらさ、やる事いっぱいあるだろうに。

女1 もう、三年生…。来年は大学、行けるでしょうか。

男1 …その為にはだから、勉強しないとダメじゃないですかね。

女1 …私、ホームセンターに行きたいわ。

男1 大学行ってくださいよ。

女1 今のうちにホームセンターに行って、いろいろ買いそろえなさいと。

男1 …買い物ですか？行ったらいいじゃないですか。

女1 皆と話していたんです。ゾンビの世界になったら、まずホームセンターに行こうって。ホームセンターなら武器や防具、食糧やアウトドアで生活できる品物がたくさんある。ホームセンターで物資を調達したら、山に行くの。元々人があまり住んでいない場所。川があれば飲み水も大丈夫。野菜の種も買って行って畑を作るわ。サバイバルの本も買わないと。私、一人でも生き残ろうと思います。

男1 …なんだか、楽しそうですね。

女1 ……

男1 楽しそうですね、そんな妄想で一日過ごせるんですから。

女1 …先生の方が幸せですよ。いっそ、先生みたいになつてしまいたいと思います。弱気に負けないようにしないと。

男1 …何を言ってるのやらさっぱりわからない。

女1 (歌う)

♪もしも 私に 好きな人が 出来たらなら その人の 言う事は

なんでも 聞いてあげたいけれど 私は 生魚だけは食べられないの

もしも 好きなその人が お寿司を好きだったらどうしよう

卵と シーチキンしか食べられない私 あと納豆

私の好きなその人に 嫌われたくは ないけれど

セロリもブロッコリーも嫌い マヨネーズも 食べられないの

肉の脂身 焼き魚の黒いとこ貝もイカも 辛い物も酸っぱい物も 食べられないわ

だけご飯は大好き うどんも好き

こんな私を 好きになって くれる人が いるのかしら

人を好きになるって どんな気持ち なのかしら

女1、歌いながら去っていく。

女2、しばらく前からそこに立っていて、

女2 先生…、

男1 ああ、君か。えっと、赤池さんだね。

女2 はい、赤池です。赤池裕子です。

男1 あ、野村さんという子は、変わった子ですね。

女2 ああ、会えたんですね。ムラさんに、じゃあよかった。

男1 あの子のせいで今日は散々ですよ。時間がないというのに。

女2 先生のおかげでゾンビが居ると言う事は分かったんですけど、そのゾンビの事もうちよつと

詳しく教えてほしいのです。

男1 あんまりゾンビゾンビ言っていると、大学行けなくなりそうですよ。

女2 大学どころか明日の学校すら来れないです。

男1 ほどほどにしてくださいね。

女2、上着を脱ぎ、リボンを外そうとする。

男1 …何をしてるんだ。

女2 先生にゾンビの事を教えて貰いたければ絵のモデルになればいいと聞いたんですけど。

男1 なんだって？

女2 裸にならないとゾンビの事を教えてくれないと。

男1 野村さんがそう言ったの？

女2 誰がつて訳じゃないんですけど、皆そう言ってるんですけど…？

男1 …いや、絵のモデル…、うーん、まあ、それらしいことは言いましたけど、それだと意味が全

然違います、どうして君達が持ち帰るとそういう話になってしまうのか…、

女2 じゃあどうしたら教えてくれますか？

男1 別にそんな、私の知ってる事で良かったら教えてあげますよ、

女2 そうなんですか！ありがとうございます。

男1 でもそんなの野村さんの方が詳しいんじゃないですか？

女2 先生のゾンビの知識は並みじゃないと聞いたんですけど…

男1 …もうわかりましたから服着てください。

女2 ありがとうございます。あ、これは皆には内緒にしておきますね。

男1 何を？

女2 裸にならなくてもゾンビの事を教えて貰ったなんて知ったら、皆殺到しますから。

男1 ゾンビバカだな君達は。

女2 じゃあ質問いいですか？

男1 あ、はい…。

女2 まず（手帳を取り出し）これだ。鍋を食べるとゾンビになるという事は、その鍋の定義からま

ずは考えないといけません。

男1 …。

女2 鍋料理とは、食材を鍋のような調理器具で煮込み、そこから直接取り分けて食べる、それが鍋

だと思っんです。そうでないと、じゃあフライパンで作った場合はどうなるのか、という問題も

出てきます

男1 …あのですね、鍋の定義とか言い出すと、相当ルールがややこしくなるので、もう鍋は大丈夫

な事にしませんか？

女2 …鍋は、ダイジョウブな事にする？

男1 鍋でゾンビになったのは昔の話ですから。それこそ、イタコの人たちがやってた方法ですから、

今はもう大丈夫なんですよ。

女2 そうだったんですか…、

男1 だから今は、噛まれたりしなければ、大丈夫なんです。

女2 はい、その事でも疑問があるんです。

男1 君はアグレッシブだな。

女2 ゾンビに噛まれた人間は感染してゾンビになるんですよね？でも噛むのは食べる為じゃないで

すか、それなのにどうして感染していくんですか？

男1 …うーん、

女2 ゾンビが食べる為に噛むんだったら全部食べきっちゃえばいいのに、どうして噛まれた人は感

染するんですか？確かにタイムラグがあるとは先生仰いましたけど、噛まれた瞬間ゾンビになる

人もいるんですかね？

男1 …それはね、人それぞれですから。

女2 ゾンビは人間がゾンビになった瞬間食べるの止めるんですか？それはその瞬間から味が変わるって事なんですか？

男1 …腐ってますからね。

女2 瞬間腐るんですか？

男1 瞬間腐っていくんです。

女2 ゾンビに噛まれてもすぐに腐っていかない人は、ゾンビになる前に全部食べられちゃうと思うんですけど。

男1 …ですね。

女2 全部食べられちゃうんだったらゾンビそんなに増えないと思うんですけどどうして増えているんですか？

男1 それはね、

女2 そうか！黙って食べられてる訳ないもんな。腕とか齧られたら振り払って逃げますもんね。逃げ切った人がゾンビになるのか。

男1 その通りです。

女2 私だったら噛まれたら気失っちゃいそう。だつてすごい痛いでしょう？私はきつとゾンビになる前に食べられちゃいますね。

男1 ですね。

女2 そうか！

男1 理解出来ました？

女2 はい！

男1 じゃあそろそろいいかな、作業に戻っても。

女2 頭を潰すと動かなくなると仰いましたよね先生？

男1 …はい。

女2 それってつまり、運動神経を司る、脳を潰すと、動かなくなるって事ですよ？

男1 …まあ、そうですね。

女2 私はつきり、タコのような、手足を切っても動いてしまう物を想像したんですけど、つまり、脳がなくても動いている状態だと。でもそうじゃないという事は、脳が命令を出して動いている、

つまり、脳は死んでないって事ですか？

男1 …まあ、そうなりますわね。

女2 じゃあ何が死んでるんですか？身体ですか？

男1 身体ですね。

女2 肉体？

男1 そう、だから心臓も動いてないし、息もしてない。

女2 それは完全に死んでますね！

男1 そうなんですよ。

女2 脳は生きてるけど身体が死んでるって事は、植物状態の逆ですね…。

男1 ですね。

女2 植物状態の逆って事は、動物状態ですね。

男1 当然ですね。

女2 それってどういう状態なんですか？

男1 もう私にもわかりません。

女2 それは生きてるって事じゃないんですか？動物なんですから。

男1 生きてますね。

女2 そうか、まだ生きてるから人間を食べるのか。

男1 やつとわかっていただけましたか。

女2 でも息はしてないんですよね？

男1 はい。

女2 息をしている事が生きてる事だと思ってたんです私。

男1 私ですよ。

女2 その常識が覆される。

男1 ゾンビとは、もう、そういう常識では考えられない存在なのですな。

女2 息をしている事が、生きている事の証明にはならないとなると、人工知能だつて生きていて、

という事にはしませんか？

男1 おっと人工知能と来ましたか、

女2 そうなると、もうひとつ困ったことが。

男1 もう充分困ってますよ私は。

女2 そうなると、命が、コンピュータの中だけで作られてしまいました。

男1 …じゃあ人工知能はナンですか。

女2 え？

男1 人工知能は命とは認めない事にしましょう！

女2 そういう事まで先生が決めるんですか？

男1 誰かが決めなきゃいけないなら私が決めますよ！

女2 おおー。

男1 もういいですか？

女2 じゃあゾンビはどちらですか？生きてるか死んでるか。

男1 ゾンビはだから…、生きてますよ。

女2 生きてるんですか…？！

男1 そりゃあ生きてますよ、動いてるんですから。

女2 …じゃあいくらゾンビでも殺すと殺人になるじゃないですか！友達は友達の為にやっているのに法律では殺人罪になってしま…。

男1 …まあね、でもそんなの正当防衛ですよ。だってゾンビの野郎は人を食い散らかしますからね。やっちゃまえばいいんですよそんな奴らは。

女2 でもこちらもバットで頭を殴打するんです。何度も何度も。それでも正当防衛になりますか？

男1 そりゃあ何度も何度もやったらね、そりゃあまあ、過剰防衛だのなんだの言い出す輩もおりましよう。でもま、一発カッソンとやればすぐですよそんなものは。

女2 一発でカッソンと…？

男1 そう、そしたらね、正当防衛ですから。

女2 でも…、ゾンビだって生きてるのに…、

男1 生きてたって死んでるのと同じだったら生きてる意味ないでしょうよ。

女2 (男1を見て) そうね、…生きてるってなんなのかしら。

女2、鼻歌を歌う(女1と同じ歌)。

男1 あのお、そろそろ作業に戻りたいんですけど。

女2 友達は、友達の為に本当によく頑張ったと思います。友達も、友達の為に、よく頑張ってます。

た。友達は最後まで鎖で縛りつけると言っていたんですけど、友達の方が縛られるのは嫌だと、どうも金属アレルギーらしくて、アレルギーが出るくらいなら今すぐ、という事で泣く泣く友達が殴ったんです。周りで見ていたみんなはずっと泣いてましたね、それを見ていた私も相当泣いてました。

男1 …は？

女2 しばらくすると、それまで倒れていた友達が立ち上がって、友達に襲いかかるんですね、おそろく殴る力が弱かったんだと思います。そうなると先ほど先生のおっしゃる様に簡単じゃないんです。何度も何度も殴らないと死なないんです。おまけになかなか頭に当たらないし、動くから、肩とか顔とかに当たると、友達は何度も何度も振り上げてました。殴った友達はそのまま逃げて、周りで見ていた人たちも逃げて行きました。私だけ何も出来なくて、見ている事しか出来なかったんです。

男1 …え？

女2 あれが本物のゾンビなんですね。じゃあ失礼します。

男1 ちよつと…、

女2 はい？

男1 …君、そんな事、本気で言ってるのか？

女2 …え？

男1 …それが本当だったら、…大事件じゃないか。

女2 でもゾンビって、そういうモノなんですよね？

男1 …ゾンビなんて居る訳ないでしょう！

女2 先生が教えてくれたんですよ、ゾンビが居るって。

男1 そんな事を真に受けるバカがどこにいるんだ。

女2 あそこに鞆取りに行くの嫌だなあ、友達の死体が転がってると思うと気が重い。

男1 …、

女2 友達は今頃警察に行ったのかしら、友達は一度死んでるとはいえ生きてるんですから。生きてるって、どういう状態の事を言うのかしら。

女2、鼻歌を歌いながら去っていく。

男1、すぐに後を追おうと行きかけるが女3がやってくる。

男1 みんなが幸せそうに…、笑って…、

女3 …（絵を見る）。

男1 …そういう、…家族に囲まれて、

女3 先生…、

男1 明るい…、

女3 もういいですよ。

男1 …（うなだれる）。

女3 ほらね。

男1 …だからさ、私みたいに、なりたくなかったら、…その、

女3 …先生は、生きてますか？

男1 …生きてますよ。

女3、歩き出す。

女3 そうですよね、死んでたら、その人の声は届かないですもんね。

女2、やってきて、

女2 今私達は、生きている事と死んでいる事のの違いについて考えているのです。

女3が去っていくのを目で追っている男1。

女2 先生なら何かいいアドバイスをしてくれるんじゃないかと思いついて。

男1 （女2に気づき）あああ…！もお！君さあ、なんであんな事言うのお？ちよつとひどくないかい？君だけはしっかりとるなあって、実は一番信用してたのにひどいよ…。もお私のこの人を

見る目の無さはなんだ！

女2 教えてくださいますか？生と死の違いについて。

男1 君がバットで殴られたって言うお友達来ましたよさつき、私のところに。

女2 え、友達が？！

男1 普通の顔して来ましたよ、ピンピンしてましたよ？

女2 …！！

男1 もうあれは全然笑えない冗談だ。なんかさ、そういう？人が死んだとか？ひどくないかい？趣味悪いよ、笑いのセンスがない。ひどいよバカ。

女2 …友達に、会ったんですか？

男1 だから来たんだって向こうから。

女2 …先生は、友達と、話をしたんですか？

男1 しましたよ普通に。人生相談に乗ってあげましたよ。

女2 …なるほど。

男1 ほら帰りなさい。私は忙しいんだ。

女2 先生は、友達と会話をした、その先生と私は、会話をしている。あー（頭を抱える）。

男1 もう君達には付き合いきれん（絵を描く）。

女2 やっぱり私、ゾンビですか？

男1 君はゾンビじゃないし、私もゾンビじゃないです。そうやってどいつもこいつもゾンビになりたがる。最近の女子高生はみんなそうなんです。将来に悲観して今を見てない。

女2 じゃあどうして私の声は届かないのかしら…、

男1 こんなところで暇をつぶしてないで何かやんなさいよ。勉強でもスポーツでも、絵を描いたっていい、何か、打ち込めるモノを見つけたら、生きていって実感できますから。

女2 そんな時、私の声、声が、届かない時、私は、生きているのか不安になる。何を言っても相手に届かない、伝わらない、この声は、私にしか理解できなくて、他の人には「あー」とか「うー」とか言う、ただ音が聞こえる程度にしか認識されていないのではないか…。伝わらないという事は、ここに居るのに居ないのと一緒だし、居るのに居ないとは、居ないのに居るのと同じだし、生きて居るのに死んでいるとは、死んでいるのに生きて居ると同じだし、

男1 …。

女2 …やっぱり私、ここに居ないかもしれないわ。

女2、鼻歌を歌いながら歩いている。

それを目で追う男1。

女1、やってくる。

女1 それでね先生、鎖の縛り方なんですけど、あれ？私、鎖どうしたかしら？

男1 …あ、ああ、これ？

女1 ああ、そんなところに。

男1、鎖を女1に渡す。

女2、しばらく歌っていたのだが、そのうち去っていく。

女1 それでね、今度はどうしたらしっかり縛れるかという話になってるんですけど、なかなか上手

く縛れないみたいで、ドラマや映画の奴みたいに縛りたいみたいなんですけどね本当は。

男1 まだやってるんですかそんな事…。

女1 当たり前じゃないですか、いろいろシミュレーションしておかないと。

男1 どうしてそのヤル気を勉強に向けられないんだ君達は。

女1 ゾンビの世界になったら勉強したって無駄ですよ、それより生き残る事です。ちよつといいですか？これを、こつやつてやりますか？

女1、男1を縛りだす。

女1 こうして、こつして、えつと、腕を後ろに回してもらっていいですか？

男1 …(回す)。

女1 これを、こつして、こつして、こつしても。これが何度やってもゆるゆるになってしまつて外れちゃうんです。これは女の子が簡単にやれる物じゃないなって、

男1 …そうなんですか。

女1 難しいんです。あー、手も痛い。小学校の時、ガールスカウトに誘われた事があつたんですけど、吹奏楽部に入っちゃつたんです私。やつておけば良かったなあ。楽器吹けてもしようがないもの。そうしたらロープの縛り方も勉強出来たし、そうしたら皆に教えてあげられるから話の輪に入る事も出来たのにな。

男1 …あのお、

女1 はい？

男1 …動けないです。

女1 え？

男1 上手く縛れてるじゃないですか。

女1 …ええ？！

男1 …全然動けないですよ。

女1 本当ですか？！

男1 ええ…。

女1 やつたー！

男1 …いや、これ、ねえ、

女1 ああ、動けないですか？

男1 動けないです。

女1 あ、ちよつとじつとしててください。…あ、ああ、こつやつて、ああ、なるほど…。

男1 わかりました？

女1 わかりません。

男1 じゃああの、一旦、解いてもらっていいですか？

女1 嫌です。

男1 は？

女1 私ちよつとバット持ってきますね。

男1 は？！

女1 金属バット。

男1 いや、ちよつと！

女1 練習しておいて、それをみんなに教えてあげる。皆きつと喜ぶわ。

男1 なんの練習だ、おい！

女1、凛々しくうなづき、去る。

男1 なんだそれは…、ねえ、君ー！ちよつと、誰かー、ねえ、誰か居ませんかあ！

女3、やってくる。

女3 (小声で) 呼びました？

男1 (小声で) ちよつと君、これを解いてくれませんか？早くしないと野村さんがやってくる。バットを持ってやってくる！

女3 (小声で) ついに先生がゾンビマスターだってバレたんですね。

男1 ゾンビマスターってなんだよだから！

女3 (小声で) せんせーが、私をゾンビにしてくれたら外してあげますよ。

男1 (小声で) よおしわかった、君をゾンビにしてあげよう！だからこれを解くんのだ。

女3 ホントですか？！あ…、(小声で) ホントですか？

男1 (小声で) 本当だよ、だから早くこれを！

女3 (小声で) わかりました…。

女3、コソコソと男1の背後に回り込む。

男1 君もあの野村からこんな目に遭わされていたんだろ？

女3 ノムラ…？

男1 あいつさてはいじめっ子だな。学級委員の皮を被りたいじめっ子だけありやあ。

女3 へえー。

男1 ゾンビごっこだろ？お前はゾンビになってしまったと言つて相手を縛り付けて、金属バットで殴る真似して脅すんだ。

女3 誰がですか？

男1 だから野村だよ、あいつ怖いな。

女3 先生、どうやって私をゾンビにしてくれるんですか？やつぱり噛むんですか？

男1 噛むのはゾンビだけだよ。私はゾンビじゃないから噛まないですよ。

女3 ああ、そうか、ゾンビマスターは人間でありながらゾンビを作りだす、イタコのような人ですもんね。

男1 そうそう！

女3 どうやるんですか？

男1 だからゾンビウイルスを身体に付着させれば簡単だよそんなものは。

女3 ゾンビウイルスを身体に？

男1 実はね、あの絵具、ゾンビウイルスで出来ているんだ。

女3 この絵具が？！

男1 そうだ。それを塗ると、君はたちまちゾンビだ。

女3 だからこの絵はこんなに気持ち悪いんですね！

男1 失礼だな。

女3 これが、ゾンビウイルス、

男1 危ない！

女3 ……！！

男1 私以外の人間が直接触れると、ゾンビになる前に身体が崩れ落ちるぞ。

女3 え？

男1 それは濃いいめのゾンビウイルスだからね、進行が早すぎてあつという間に身体が腐っちゃうのさ。

女3 どうしたらいいんですか？

男1 三倍くらいの水で薄めるんだよ。それは私にしか出来ない。だから早くこれを解くんのだ。

女3 わかりました！

男1 しかし君、ゾンビになったら大変だぞ、その覚悟はできてるんだろうな。

女3 もちろんです！

男1 もう、人間には戻れないんだぞ。

女3 覚悟の上です。

男1 よおしわかった。じゃあ早く解けい！！

女3 はい！

男1 ……

女3 ……

男1 ……ねえ、やってる？

女3 まず結び目がどうなっているかを見てからの方が効率がいいんです。適当にガチャガチャやると余計に絡まります。

男1 そういうものなの？

女3 先生は、どうしてゾンビウイルスなんて作ったんですか？人類を滅ぼすおつもりですか？

男1 私だつてね、そういうつもりはなかったですよさつきまでは。でも君達が、あまりにも先生をバカにするからね、そういう世界にしてあげたんですよ。

女3 私たちに罰を与える為？

男1 そうだよ。この世界を地獄にしてやる。生きながらにして地獄に変えてやるのさ。

女3 ほぼ裸で…。

男1 そうなるね。

女3、顔を両手で多い、うずくまる。

男1 …じゃあもういいですよ君は、

女3 え？

男1 もうあなたは地獄でも服着てていいですから。

女3 いいんですか？

男1 特別ですよ。

女3 ありがとうございます。

男1 …ねえまだあ？！

女3 全然わかりません。

男1 もうガチャガチャやった方がいいんじゃないの？

女3 私ちよつと、お友達に聞いて来ます。

男1 そんな悠長な事やつてる暇ないんだつてば。

女3 そうださつき鎖で縛つてる人見たんで解き方も知ってるかもしれない、ちよつと聞いて来ます。

男1 その友達つて野村だろうがよ！ダメだよ、ミイラ取りがミイラになつちやうよそんな事したら。

女3 ノムラつて誰ですか？

男1 野村だよ、野村栄子。

女2、やってきて、

女2・3 …はて、クラスにそんな子居たかしら、

女3、去る。

男1 ああ、赤池君か。君ね、私に少しでも悪いなあと思つてるならこれを解いてくれないか？

女2 私としては、先生がイタコで良かったと思つてるんです。

男1 おい、話の拡がり方が早すぎないか。

女2 イタコなら人間だし、先生と話をしている私も人間だつて思えますから。

男1 私はイタコじゃないよ。イタコに失礼だよバカ。

女2 しかし地獄からやつてきたイタコ魔人とは予想外です。

男1 俺だつて予想外だよバカ！なんだイタコ魔人て。

女2 この世界を地獄に変えるんですよ？

男1 君達、どつかその辺で聞いているだろさては！

女2 先生が話してくれたんですよ、絵具の話も全部。

男1 あれはだから…あれ？もお誰と話をしていたのか分からなくなつて来た。

女2、絵を見て、

女2 ………！

男1 …それは、そういう絵なんです。まだ下書きなんです。そりゃあ確かに私も調子に乗つてしまつた節はありましたよ。でもね、それもこれも最初の誤解がいけないんですから、

女2 イタコ魔人。

男1 もうお願いですから、皆さんここに連れて来てくれませんか？直接話をしたいです私。

女2 今、生徒の何人かが先生を狙つてますよ。

男1 狙つてるつてなんだ…？

女2 先生がゾンビを作り出しているイタコ魔王なら、全ての元凶は先生だから、先生を隔離すればいいんじゃないかと言う話になりまして、

男1 私はただ君達の相談に乗つてあげただけじゃないか、それがどうしてこんな目に遭うんだよ。

女2 生徒の何人か以外の何人かは、先生はイタコ大王ではなくゾンビの起源、オリジナルスーパージンビじゃないかと。

男1 オリジナルスーパージンビつてなんだよもう！君達は名前つけるの好きだよなあホント！そり

やあね、ゾンビみたいな人間だって陰口を叩かれても仕方のない人間ですよ私は。生きてるのが死んでるのかわからないような生活してますからね。帰宅して、ご飯を食べて、寝て、起きての繰り返しですから。だからまあ、そういう意味では、私はゾンビですよ。でもね、ゾンビだったら言葉通じないんだから、腐ってもないし、人を食べたくもなっていない。今日は帰る途中にラーメン食べたいくらいだもん。スープゾンビだったらラーメン食べたいなんて思わないんだもん。別にいいんですよ、何を言われても。スープゾンビだったらスープゾンビでもいいんですよ。近寄りなければいいじゃないですか。私からも近寄りませんから。もうお願いだから皆さんに危害を加えるような存在にはしないでいただきたいですお願いします。

女2 ……。

男1 ……。

女2 ……ごめんなさい。

男1 ……いや、わかって貰えれば、いいんですよ。

女2 この絵、コンクールに応募するんですか？

男1 ……まあそれもさ、生きている事を確認する為に描いているのかもしれない。そうでもしないと、実感ないですからね…。

女2 (微笑み) でも先生、この絵は止めた方がいいですよ。

男1 ……どうして？

女2 だってみんな言っていました、この絵はまるでゾンビの様だって。

男1 ……ああ、それで (微笑)。

女2 ゾンビが描く絵だから、ゾンビみたいになるんだって。

男1 …… (微笑み) もお、ひどいなあ。

女2 ゾンビの描く絵は、いつも血だらけだって。

男1 (微笑み) 参ったなあ。

女2 ゾンビの夫が描いたゾンビの妻と息子だって。

男1 ……ハハハ。

女2 ゾンビの夫が妻と息子を食べたから妻と息子もゾンビになっちゃった絵だって。

男1 もうそれ以上言わないで、なにそれ、

女2 私、皆に話してみますね。先生はゾンビみたいな顔してるけど本物のゾンビじゃないんだって。ゾンビの事詳しいだけでイタコでもないって。

男1 ホント？そうしてくれる？もう君だけが頼りなんだ。

女2 私今までずっと皆の事遠巻きで見ただけだけど、勇気を出して発言してみようと思います。

男1 それはうん！お願いします！あと早くね！野村が来るんだよ、あいつ危険だから。

女1、金属バット持ってやってきて、

女1・2 わかりました！

女2、去る。

男1 とはつきりと言ったくせに全然話を通じないじゃないか、ちゃんと話したのかあの子は…。

女1 先生、持つてきました！

男1 何がそんなに嬉しいんだ…。

女1 ねえ先生、どうしてほしいですか？ゾンビに成る前か後か。私やりますよ、先生だったためらいなく一発でいける自信あります。

男1 聞いてないんですか赤池さんから、私はただの、ゾンビっぽい人間ですから。紛らわしくてすみません。

女1 私としては成った後がいいですね。人がどんな風にゾンビになるか、この目で確かめておきたい。

男1 聞いているのか？もはや君だけですよ、いつまでもそんな事を言っているのは。

女1 私、こんなにワクワクした事ないです。だって世界がひっくり返るんですよ！この社会が、一気に崩れるんです。学歴も地位も収入も、煩わしい人間関係も、国境も戦争も宗教も、全部ゼロになる。こんな事ってありますか？

男1 君ね、どこの組のなんだ、担任に言いつけてやるからな。内申書にひどい事書かれたくなかつたら解き給え。いいか、これは脅しじゃないぞ、本当だからな、本当に言いつけてやるからな！

女1 さあ頑張ろう。私これから精一杯生きますね。今までだつてずっと一人だったんだからこれからも大丈夫。慣れ合いなんてまっぴらだ。結局信じるのは自分だけ、誰にも従わないし従わせない、そういう生き方をして行こう。

男1 ……なんて恐ろしい子供たちだ。近頃の子供たちは狡猾でいけない。大人の目を簡単にだまくら

かす。私たちの頃はもつと誠実な子が多かったですよ。不良は不良だと一目でわかりましたからね。誰だ、子供達をこんな風にしてしまったのは。どうしようもない大人が増えちまったのがいけないんだ。そんな子供にならないようにこちらがどれだけいい子に育ててもバカな親に育てられたバカな子が周りにいると、良い子の方がバカを見る世の中だ。

女1 あら先生大丈夫ですか？ちよつと熱っぽくないですか？ゾンビウイルスに感染すると、最初風邪みたいな症状になるんですって。ちよつとゾンビになりかけてるんじゃないですか？

男1 なりかけてるんだ？バカ。

女1 まだかなあ…、

女1、素振りの練習。

男1 誰か、誰か居ませんかあー？

女3、顔を出し。

女3 呼びました？

男1 あ、上田さん！彼女なんかありませんか？もう私の言う事じゃあ聞いてくれないんだ。

女3 ちよつと待ってください。

女3、去る。

男1 え、ちよつと！…何しに来たんだあの子は。

女2、やってくる。

女2 先生…、

男1 ちよつともお君さ、ちよつとも話がまとまってるじゃないかよ、ちゃんと言ったのかよ？

女2 あのですね、教室に戻ったら友達死体、消えちゃってたんですけど、どっ行っちゃったんですかね？

男1 もう何を言ってるんだかわからんだよ君達の言ってる事は。

女2 ？

女1と女2、目を合わせ、会釈をする。

男1 ちゃんと聞いてほしいんですよ。今一番何が大事なのか、今の話題はなんなのか？相手がどういうつもりでその話をしてるのか、ちゃんと考えてこそ聞き取ったという事になるんですよ。

女3、顔を出し、

女3 呼びました？

男1 こうして呼んでもないのにやって来る奴もいるしさ、

女3 先生、私頭が痛いんですね。

男1 ああ、じゃあ殴られたのかなあ？金属バットで殴られたらそれは重傷だろうよ！

女3 ゾンビになるって決めたら気が大きくなっちゃって、その辺歩いてる友達にゾンビになりたいと言ったら思い切り殴られました。私、涙が出るほど痛かったですけど、殴った友達はもつと泣いてました。そんな事言うもんじゃないって、生きてる間は精一杯生きなさいって、手を真つ赤に腫らして、私の為に泣いてました。

男1 その様子を見て、君（女2を見て）は金属バットで殴った話をしたのか。相当な食わせもんだな。

女3 私、あんな子がこの学校に居たなんて知らなかったからびっくりして…。私、その友達のためにもう少しちゃんと生きてみようと思います。

男1 アホだな。そうやって大人をからかって何が楽しいんだ。

女3、女1と女2と目を合わせ、三人会釈。

男1 もう参りましたよ、私の負けでいいですから、もう帰りたいです私！

女1 え、何年生？

女2 …三年。

女3 三年です。

女1 何組？

女2 ……A。

女3 E組。

女1 私、I。

男1 君達初対面なの？…え、同じクラスじゃないの？…どういう事なんだ？同じ教室で同じ話をしていた訳じゃないの？！

女1 先生、鞆取ってきます。

男1 なんだ、帰るのか？

女三人、距離を詰め、

女1 数III得意？

女3 あ、全然。

女2 ……私も。

女1 今回ちよつとやはいんだよね。

女3 え、美術選択してるの？

女1 ううん、音楽。

女3 ああ。

女1 取る訳ないじゃん美術なんか。

男1 *なんだ？こら！君達の名前はメモってありますからね、忘れませんよ。だったらほら、謝るなら今のうちですぞ。あとから担任に言われて反省するようだったら今謝った方がいいと思いま

すけどね。後に回せば回すほど事態はこじれていくんですから。だいたい君達はこんな時間まで何をやつとるんだ、来週テスト週間だぞ、大丈夫なのかそんな事で。

女3 *そくだよね。

女2 私、書道クラス。

女3 あ、書道なんだ。

女1 え、書道つてさ、習字道具毎回持ってくるの？

女2 あ、ううん、置きっぱ。

女1 だよね。

女3 私技術家庭。

女1 ああ、迷ったんだよねえ。

女2 私も。

女3 え、なんで？

女1 だつて調理実習とか？

女2 ううん。

女3 この前ハンバーガー作ったよ。

女1 ハンバーガー？

女2 ハンバーグじゃなくて？

女3 うん、ハンバーガー。パンズから作つてね、

女1 すこーい。

三人、去っていく。

男1 おいこら！、鞆を取ってくるのはいいけどその前にやる事があるだろうが！この鎖を解きなさいよ！こら！聞いてるのか！君達は一体何がしたかったんだよ？君達がさ、友達じゃないんだつたらさ、偶然同じような話をしていたつて言うのか？バラバラの場所か？似たような話？！そんな話あるう？！だつておかしいじゃん、最初に友達がゾンビになりそうだからどうしたらいいつて言う相談を野村さんがしに来たからさ、身動き取れないように縛つたらいいんじゃないかつて言つたんだよ、そしたらなんで赤池さんがそれと全く同じような現場を目撃してるんだよ。それとは関係の無い場所では死にたがりの上田さんが居てさ、死後の世界の話をしてあげたら、野村さんから友達がセクハラ受けたつて言われてさ、その繋がりも偶然にしちゃ出来すぎだし、次の瞬間にはなんで私がセクハラ教師になって服を脱がないと内申書に響くたの変態教師だの言われなきやなんのよ？別々の場所で噂が広まったにしちゃあ話の拡がり方が早すぎるだろうがよ！それが女子高生の拡がり方つて言うの？ゾンビウイルスも顔負けの拡散スピードだな。だいたいなんだゾンビウイルスつて。誰が言い出したんだバカ。…でもセクハラの話なんか聞いてないつて赤池さんから聞いた時点で別現場の話だつて私が気づかないといけないなかつたつて言うの？それは無理だぜえ、無理無理、そんなシャーロックホームズじゃないんだから瞬間的にいるんな

可能性考えられないよお？だって次から次へと私はゾンビマスターからイタコになってイタコ大魔神にさせられてさ、私は青森行つた事ないんですよ？そんな悪の親玉みたいに言われても困っちゃうよ。だいたいイタコと大魔神は全く違う相容れないものなのになんちゆうネーミングセンスしてんだバカ。だから同じ場所の話だったら全員が嘘ついてる訳だから、それは一体何が目的なのかって考えると私をからかってるんでしょ？だったらもうそれは達成されたんだからいいじゃないかこれを解いてくれても、いつまでこんな事続けるんだ！

三人、鞆を持ってやってきて、

女1 じゃあ先生帰ります。

男1 いや、帰るのはいいんだけどさ…、

三人 さようなら。

三人、お辞儀をして去っていく。

男1 …鎖は！これ解いていきなさいよ！ねえ！

女3 近く？

女1 まあまあ、

女2 あ、私も…。

男1 *ねえ、別現場の話だったら皆は嘘をついてない訳だからこれが目的じゃないとなると私のリアクションなんか関係ないっていうの？だから放って帰っちゃうの？でもそうすると赤池さんが見たって言う、友達が友達を金属バットで殴ったって言う話は一体…

女3 *あのイオンに向かう道にさ、ケーキ屋さんあるでしょ？

女1 あ、知ってる！美味しいんだよね？行った事ないけど。

女3 ガトーショコラが美味しいよ。

女1 ホント？食べたい！

女3 行っちゃう？

女1 あ、うん！

女3 どうする？

女2 …行く。

女3 じゃあ行く皆で。

女2、立ち止まり、

女2 …私、他のクラスの子と話すの初めてかも。

女1 私なんかクラスでも話さないよ。結構浮いてるから。

女3 私もなんだよね…。

三人、微笑んで去る。

今までは夕陽が射していたが、日が暮れて廊下の電気だけで見えていた美術準備室。その廊下の電気も消されて、非常灯の灯りでかろうじて見えている状態。

男1 おいー！電気は！電気つけなさいよ！ねえー、ちよつとー！人の事散々遊んでおいて和気あいあいと甘いもん食べに行くってどういう神経してるんだ！ちよつとー！こらー！私の疑問がまだ残ってるんですよ！ねえー！

静まり返る学校。

男1 …あのお、誰かー、…誰か居ませんかあ？

夜。

…終…

【上演記録】 2016年1月22日～24日 AI・HALL（伊丹公演）
2月11日～13日 名古屋市東文化小劇場（名古屋公演）
2月19日～23日 こまばアゴラ劇場（東京公演）
3月12日～23日 穂の国とよはし芸術劇場（豊橋公演）

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp